2014年度
入試問題

一　次

国　語

注意

- この冊子は17ページまであります。
- 問題は一から三までです。
- 解答用紙は冊子の中ほどにはさみこまれています。
- 時間は50分です。
- 解答はすべて解答用紙にていねいに書いてください。
- 特別に指示がない限り、句読点なども字数に含まれるものとします。
- 解答用紙のみ回収します。

渋谷教育学園
幕張中学校

一　次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

公立の上谷東小学校に臨時講師として勤めている音楽教師の森島巧は、彼が教えている六年一組の鈴木捷という児童のことが気になっている。捷はピアノを弾けるにもかかわらず、歌がとても下手だからだ。この小学校の音楽科には、もう一人専任教諭で学年主任の白瀬美也子がいる。

文中に登場する教頭・坂巻・安西・長浜は同僚の教師である。教頭と坂巻は仲が良く、安西と長浜は森島にとって話のしやすい関係にある。

放課後、プリントの整理をはじめた安西にはなしかけた。

「ちょっといいですか。お仕事しながらでいいので」

周囲に、話を聞かれてまずそうな顔ぶれは、見当たらない。向かいに長浜がいるが、むしろ会話に加わってもらいたいくらいだ。

「なんでしょう」本当に手を休めずに答えた。

「鈴木捷、ご存じですか」

「ええ、名前と顔くらいは」

「彼、歌がおもいきりへたなんですけど、その理由を知ってます？」

「へた？」ようやく手を止めて、森島の顔を見た。「音痴ってことですか？」

「ええ、半端じゃなく」

「さあ」首をかしげて、また作業にもどった。「わたし、受け持ったことがないのでよくわかりません」

「鈴木はわざとへたに歌っていると、発言した児童がいるんです」

「わざと？」

「ええ。去年白瀬先生となにかあって、それでわざとへたに歌うようになったと」

「まさか」ふたたび手をとめたが、こんどは森島は見ずに、机の一点を見つめ考えている。「それは考え過ぎじゃないですか。だって、今は森島先生なわけですから」

「そうなんです。そこが不思議なんです。それと、これは偶然見たんですけど、彼、小学生にしてはかなりピアノがうまいんです」

「ピアノが？」

「ええ。あれはきちんと習っているはずですし、音楽センスもそこそこあるはずです。だから、わざと音程をはずして、っていうのもなんだかうなずけて——」

「まあ、たしかに白瀬先生は厳しい方ですから、〔注1〕萎縮してしまった可能性はありますね。白瀬先生の性格だと、才能のある児童ほどびしびししごきそうですから」

わたしもあの方が苦手です、と笑ってまた仕事に戻ってしまった。①質問とは焦点がずれていると思ったが、仕事が忙しいのだろうと、それできりあげることにした。

期待の長浜は、噂話よりも優先すべき仕事があったらしく、途中でどこかへ消えてしまった。

上谷東小には、毎年十一月に、校内合唱会という行事がある。

五年生、六年生の計六クラスが、それぞれ二曲ずつ、体育館の壇上で合唱を披露するのだ。ただ、それだけのことだが、PTAの役員はもちろん市議や商工会の(a)メイシなどを客として呼ぶのがしきたりになっている。特に青木校長になってからは、その

人脈で来賓の数も質も上がったと聞いている。

児童よりも、むしろ教師たちが緊張するイベントらしい。プロの合唱団のようにはいかないが、音楽教師としてそこそこ恥を掻かない程度には、仕上げないとならない。今年、上級生の六クラスを見ているのは森島だった。選曲はベテラン音楽教諭の白瀬美也子が決めるし、最終的には彼女のチェックが入ることになっているが、普段の授業はこれまでどおり、森島が教えていいことになった。当日の指揮も森島だ。校長の「やらせてみたらいいじゃないですか」のひとことで決まったらしい。おそらく、うまくいかなければ「交替させたらいいじゃないですか」となるのがみえていた。

「好ましい状態とはいえないが、それが原因でクラスが荒れるというわけでもないので、(注2)看過してください」

教頭にはあらかじめ、捷の態度についてそう［ A ］をさされていた。したがって、もともと深くさぐるつもりはなかった。しかし、かれはリストの『ため息』を弾いていた。小学六年生が、我流であそこまではいかない。きちんとした音楽教師に習ったというのは確からしい。

もともと上手に歌える人間が、なにかの原因でへたになることなどあるのだろうか。可能性があるとすれば、塚原まどかが指摘したように、わざとそうしているとしか考えられない。

安西が事情を知らないとなると、事情の把握に少々てこずる。

それでも森島は三日ほどかけて、白瀬本人はもちろんのこと、教頭や坂巻に話が漏れないような相手と場所を選んで、話を聞き出した。およその事実関係を摑むことができた。

いまの状態からは想像しがたいが、やはり昔の捷は、歌が飛び抜けてうまかったらしい。

昨年、捷のクラスを受け持ったのは、現在二年一組を担任する、白瀬美也子教諭だった。彼女は、正規の職員で音楽を主に受け持っていた。学年主任と学科主任という、ふたつの肩書を持っている。

小学校は、担任が原則として全教科を教える——教えられる能力を有する——②建て前になっている。しかし、教師にも得手不得手があり、教諭間で受け持ち教科のやりとりをすることは珍しくない。とくに、音楽にその傾向が強い。勉強は努力でなんとかなるが、音楽センスは磨くのにも限界がある。

美也子は、全校クラスのうち半分ほどの音楽をみた。そのかわり、他の教科——とくに体育や理科、算数などを代行してもらっている。今年もそれは変わりがない。

白瀬美也子に対する教員うちでの③あだ名は、〝原理主義者〟だった。年齢は今年四十七歳。私生活をまったく語らないが、結婚していて子どもはいないらしい。雑談も冗談も言わない。授業中には、音楽に関わる以外の話は一切しない。当然、子どもたちからの人気度も限りなくゼロに近い。家では、時計の代わりにメトロノームが時を(b)キザんでいるという噂が、なかば信じられていた。

昨年、捷たちが五年生になってひと月ほど経ったころ、授業中に白瀬美也子教諭が野口悠太を叱った。

「あなた、ふざけているの?」いつもどおり、計算して作ったような表情だったが、目には怒りが満ちていた。「まるで、酔っ払ったニワトリの鼻歌みたいに聞こえるわね」

この発言の内容は、クラスの児童によってほぼ正確に伝聞され、④女史が放った唯一の冗談としていまだに語り草になっているそうだ。

「あなたのその不真面目な態度は不愉快です。我慢なりませんね」

白瀬美也子が野口悠太を受け持ったのはこの年がはじめてだった。悠太はふざけていたのではなかった。もともと歌がへたなのだ。悠太は口数が少なく、口元の表情がいつも微笑んでいるように見える。人によっては、開き直ってにやついているように受けとめるかもしれない。しかし、悠太としてはまじめに歌っているつもりなので、悪びれたところがない。そのあたりも、ふてぶてしく感じられる原因なのかもしれない。

結局この日、授業の残り時間のほとんどが、野口悠太の指導にあてられた。三十分近く立たされたまま、なんどもなんども同じところを繰り返し歌わされた。やがて悠太が鼻をすすりはじめ、とうとう泣き出して歌どころではなくなってしまうまで続いた。

「もう、座ってよろしい」白瀬が、あからさまに蔑(さげす)んだようなため息をついた。「鈴木君を見習いなさい」

授業も残り十分を切るころになって、白瀬が名をあげたのが、鈴木捷だった。

悠太は、すでに身長が百六十センチを超え、しょっちゅう中学生に間違えられる。しかし、性格はおっとりしていて、行動もやや緩慢なところがあった。一方、鈴木捷は色白で、身体つきも小柄だ。実際の年齢よりも、年下に見られることもある。しかし、上級生にからかわれて歯向かっていくこともあるほど、気が強い面もあるらしい。歌がうまいことはクラスの全員が認めていた。

「鈴木君」白瀬が指名した。「お手本を見せてください」

捷はたちあがったが、遠慮がちに言った。

「悠太は、あんまり歌が得意じゃないんです。ふざけているんじゃないと思います」

白瀬の目つきがきつくなった。

「あなたに意見は求めていません」三年生のときから受け持って、[B]をかけていた捷に反論されて、ますます声がうわずった。「ふざけているかどうかは、先生が決めます」

とにかく、あなたが歌ってみなさい。(c)甲高い声で命じられ、捷が歌った。

はじめは、いつもどおり文句のない歌い出しだったらしい。しかし、途中で突然音程が狂いはじめた。白瀬のピアノの音が止まった。白瀬が捷を睨(にら)む。⑤捷の顔は青ざめて強ばっていた。

「どうしたの、鈴木君。もういちどはじめから」

もごもごとした声で、再び歌う。こんどは、はじめから音程が狂っていた。

「もういちど」

終業のチャイムが鳴っても、まだ抑揚のない歌が続いた。

やがて、鍵盤から顔をあげた白瀬のもともと青白い顔は、(d)ウれた桃のようにピンク色になっていたそうだ。

「⑥こんな侮辱を受けたのは、教師になってはじめてです」

めずらしく、鍵盤の蓋(ふた)を乱暴に閉めて、挨拶(あいさつ)もせずに教室から出て行った。

この一件は同じクラスの児童が親に報告したことが(e)発端で、学校側に知れた。しかし、特に問題になった記憶はない、と長浜が説明した。

「むしろ、教員の中では……」長浜が、これ以上ないほど、声をひそめた。「鈴木の勇気は表彰ものだっていう冗談が出たくらいだから」⑦その長い顔に、不敵な笑みが浮いた。

このとき以来、捷の歌はへたになった。

教頭が、捷を呼んで諭(さと)したこともあったらしい。しかし、捷は「ふざけてはいません」と答えるだけだ。授業中に奇声を発するのでもなければ、ふざけているという客観的な証拠はない。態度だけを見れば、むしろ模範的、ただ歌がへたなだけ。結局、捷の通知表にも、悠太と同じ1がついた。長浜は捷の両親に会ったことがあるらしいが、きまじめで、学校にクレームをつけるなどとは考えもしないタイプらしい。きゃしゃな捷が、なんとか元気に通学してくれればと、それが望みのようだ。二階建ての大きな家で、父親の両親と同居している。この祖父母が芸術面の教育に熱心で、捷が小さいころから絵画や音楽教室に通わせたのだそうだ。

「鈴木はどうして急にへたになったんですか。やっぱり、わざとですか」

森島の質問に、長浜が答えた。

「捷がなにも語らないので、心の中の真実はわかりませんが、まあ、わざとでしょう。捷と悠太は親友どうしなんですよ。皮肉なことに」

なるほど、それでなんとなく理解ができた。友情と自己犠牲が、天秤(てんびん)の両皿に載るような年頃なのだ。

「ですけど、そもそもどうして白瀬先生は、野口悠太にそんなにつらくあたったんでしょう」
首をかしげる森島に、長浜があっさり答えた。
「単純明快、嫌いだからです」
「嫌い？」
そんな理由はないでしょう、と言いかけたが、長浜はしごく当然のように説明した。
「あくまで想像の域を出ないけど、たぶん間違いないですね。白瀬先生は、野口みたいな、ぽてっとしてちょっと鈍い感じで、しかも音痴の男子が大嫌いなんです。これまでにも何人か攻撃対象にあがったし」
「嫌いだから集中攻撃するんですか」
「教師も人間だから」そう言ってから、あわてて、でも、とつけ加えた。「客観的事実関係でいえば、歌のへたな児童に、丁寧に指導しているだけですから」
「それでも、受け持って一ヵ月間は我慢したわけですね」
「それも、違うと思いますね」長浜が嬉しそうに話す。「一ヵ月経って、ようやく野口の存在に気づいたんですよ」
白瀬教諭の面目躍如というところか。
教頭も、その白瀬には一目置いている。⑧**「鈴木捷の問題は放っておけ」と言われた理由がようやくわかった。**

（井岡瞬『教室に雨は降らない』による）

（注1）萎縮……相手の勢いに圧倒されてちぢこまること。
（注2）看過……大したことではないとして見のがすこと。

問一　═══（a）～（e）のカタカナは漢字に、漢字はひらがなに直しなさい。

問二　[A]・[B]に当てはまる語句を考えて答えなさい。（ひらがなでもよい）

問三　――①「質問とは焦点がずれていると思った」とあるが、その「ずれ」とはどのようなことか。最も適当なものを次の中から選びなさい。
ア　森島は鈴木捷の歌がへたな理由を聞いたのに、安西は本人をよく知らないからと答えてくれなかったこと。
イ　森島は鈴木捷の歌がへたな理由を聞いたのに、安西はわざとへたに歌う訳がないと相手にしなかったこと。
ウ　森島は鈴木捷の歌がへたな理由を聞いたのに、安西は白瀬先生の指導の仕方を答えたに過ぎなかったこと。
エ　森島は鈴木捷の歌がへたな理由を聞いたのに、安西は白瀬先生が苦手らしくて答えるのをためらったこと。

問四　――②「建て前」と反対の意味を持つ語句を漢字で書きなさい

問五　――③「あだ名は、〝原理主義者〟だった」とあるが、〝原理主義者〟という表現から、周囲の教員たちは白瀬先生をどのような先生と見なしているか。最も適当なものを次の中から選びなさい。
ア　今までのやり方が絶対であると考え、新しい手法を受け入れない先生。
イ　自分の考えを信じ、何事もそれに基づいて物事を押し進めていく先生。
ウ　授業に遊びは必要ないと考え、真面目なことしか言わない完璧な先生。
エ　成績が良い生徒ほど優秀な人間である、という理念を持っている先生。

問六　――④「女史」とあるが、「女史」の国語辞典での意味は、「社会的地位や名誉のある人」である。文中でこの語句が使われているのはこの一文だけであることを踏まえて、この語句が用いられている意味として、最も適当なものを次の中から選びなさい。

ア　学校の評価を上げて信頼を厚くした白瀬先生に対するねたみ。
イ　真面目さの際立つ白瀬先生が意外な一面を見せたことへの驚き。
ウ　冗談すら計算した上で使っていると思われる白瀬先生への軽蔑。
エ　音楽のことばかりの白瀬先生が冗談を言ったことへのからかい。

問七　――⑤「捷の顔は青ざめて強ばっていた」とあるが、このときの捷の様子を説明したものとして、最も適当なものを次の中から選びなさい。

ア　自分は正しいと思いながらも非常に緊張している。
イ　先生に睨まれたことで我に返りうろたえている。
ウ　どうすれば良いのか分からずただ呆然としている。
エ　大それたことをしてしまったと怖さにふるえている。

問八　――⑥「こんな侮辱を受けたのは、教師になってはじめてです」とあるが、白瀬先生にとって、「こんな侮辱」とはどういうことか。その内容を五十字程度で具体的に説明しなさい。

問九　――⑦「その長い顔に、不敵な笑みが浮いた」とあるが、このときの長浜先生の様子を説明したものとして、最も適当なものを次の中から選びなさい。

ア　白瀬先生を快く思っていないので、喜びが顔に出てしまっている。
イ　この問題には自分は無関係なので、同僚の失態を楽しんでいる。
ウ　こんなに胸のすく話はまたとないので、噂話を広めようとしている。
エ　鈴木捷を処罰することで、事態がさらに悪化することを期待している。

問十　――⑧「『鈴木捷の問題は放っておけ』と言われた理由がようやくわかった」とあるが、その理由を四十字以内で説明しなさい。

二　次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

最近は、児童文学に(a)カンシンをもつ大人の人が大分増えてきたが、それでも、子どもの本を読んでいると言うと、(i)けげんそうな顔をされることが多い。なかには、「子どもの気持を理解するためですか」などと言う人もある。私が心理療法という仕事をしているので、子どもの治療をすることがあるため、子どもの気持の理解が必要だし、子どもの本を読んで参考にしている、ということであろう。確かに、私の仕事である心理療法と子どもの本を読むことは密接に関連しているが、それは、「子どもの気持を理解するため」などというよりは、もっと直接的な関連をもっていると考えている。心理療法も、子どもの本も、われわれがこの世に生きるということの本質にかかわってくるのであり、その点において(b)フカブンに結びついていると思うのである。

生きることの本質などと言えば、文学も哲学もあるのに、何を好んでわざわざ子どもの本を読むのか、と言われそうだし、何よりも、そんなに子どもっぽいことが、大人の生きることと関係したりするのか、と言われることだろう。しかし、①この「子どもっぽい」ということそのものが、そもそも問題なのだ。大人は、子どもは「子どもっぽい」と考える。そして、大人のなかでも「子どもっぽい」人は、あまり信頼がおけないとか、大したことはない、と思うだろう。果して、大人と子どもということを、それほど単純にとらえていいのだろうか。いったい子どもとは何か、ということをもっと深く考える必要があるだろう。このようなことを考えてみながら、子どもの本を読む意味について考えてゆくことにしよう。

現代においては、子どもの問題がジャーナリズムをよく賑わしている。子どもの自殺はひと頃ほど騒がれなくなったが、不登校や家庭内暴力はなかなか減少しそうにない。それと、現代における子どもの問題の特徴は、一般のどのような家庭においても、問題の発生する可能性をもっている、ということであろう。事実、われわれ治療家のもとに子どものことで相談に来る両親にお会い

すると、一般的な意味において、その親のどこが「悪い」などと簡単には言えないことが多い。もちろん、反省し出すなら、誰だって反省すべきことはあるだろうが、他の家庭や親子関係と比較して、特別に変なところがあるわけではないのである。しかし、家庭内暴力をふるう子どもに言わせると「親が悪い」のであって、そのために子どもは散々に暴力をふるうのである。それが時に両親を死に至らしめるほどのものであることは、新聞の(c)ホウドウなどによって、よく知られているとおりである。両親にすると自分たちは特別に他と比べて悪いところがあると思えないのに、子どもが荒れ狂うので、ついには自分の子が精神病ではないか、と思う人も多いのである。しかし、子どもたちは精神病ではない。それでは彼らは何に対して怒り狂っているのだろうか。

これは端的に(d)カクシンをつく例なので、これまでも述べたことがあるが、次のようなことがあった。両親が暴力をふるってくる子どもに向かって、自分たちがこれまで何でもお前の欲しいものを与えてやってきたのに、何が不足で暴れるのかと尋ねた。それに対して子どもは、「②うちに宗教がない」と答えたのである。このように子どもが発言してくれたのは、この子が随分とよくなってきているからであり、普通はなかなかこのような表現もできず、本人でさえ何が不足であるのかはっきりとは解っていないことが多い。しかし、この子のように明確に言われた場合、多くの日本の家庭においては、答に窮するのではなかろうか。ここで、子どもが「宗教」と言っていることは、単に葬式を仏教でするかどうかなどというのではなく、もっと本質的な問いかけであることはもちろんである。

考えてみると、③この親子の問答は日本の現在の状況を極めて端的に表わしているものと言える。「欲しいものはすべて与えた」ということは、本当にひるがえって考えると、神のみが言えることではなかろうか。他人の欲するものをすべて知り、そのすべてを与えることなど人間にできるはずがない。しかし、多くの親はそれを子どもにしてやってきたと思う。いったいこれはどうしてなのだろう。これは物質的な豊かさをすべてと思うところに基礎があると思われる。特に、現在、親となっている人たちは物質的な窮乏を体験した人が多いので、自分の子どもにはこの苦労をさせたくない、というよりはむしろ、多くの物を与えてさえやれば、すなわちそれで④満足であると思っている。しかし、それは「豊かな」ことであろうか。その点を、子どもたちは真直に突いてく

るのである。

物の豊かさがすべてであるならば、確かに、現代人は大分「神」に近づいていると言えるかも知れない。「欲しいものはすべて与えた」という親には、無意識に神に近づいたものとしての傲慢(ごうまん)さがある。しかし、それは実のところ神に近いわけでも、豊かなわけでもない。絶対に不足しているものを指して、子どもは「宗教がない」と言ったのである。このように考えると、家庭内暴力の子がよく親に対して、「なぜ僕を生んだのか」と喰ってかかる事実が思い起こされる。これはむちゃくちゃなことを言っているようだが、少し考え直してみると、「なぜ生まれてきたのか」、「どこから来たのか」という人間存在にとって、もっとも根源的な問いにつながっているように思われる。これらの、もっとも根源的なことを不問にして、ただ物ばかり与えられ、しかも、それで何の不足もないだろうなどと断定されては、子どもとしてはたまったものではない。こんなことを考えると、子どもたちが暴力をふるうのも無理はないとさえ感じられるのである。

どうして、現代の子どもたちはこのような根源的な問いかけを、しかも極めて(注1)ラディカルな形で、親に対して投げかけてくるのであろうか。それは多くの親たちがあまりにもそのことを忘れているからである。大人は忙しいのだ。家が必要だし、車も欲しい。それに、家にも車にもいろいろ種類がある。親類の誰それが、友人の誰かがどんなのを持っているかも気になることである。そして、何をするにもお金がいるのだ。こうしてあまりにも忙しくしていると、お金がすべてのような錯覚が起こってくる。

もっとも、(ii)あこぎにお金をためこんだ後で、「皆さん心が大切です」とか説教したり、お金のもうけ方が解らぬのであきらめたあげく——と言っても簡単にはあきらめられぬものだが——「愛情が大切」などと強調してまわる人たちもいる。しかし、子どもたちの問いかけはそんなものを(e)イッキョに破ってしまう強さをもっている。家庭内暴力の子に、どれほど立派な「説教」をしても、おさまることはないであろう。

大人たちの現実認識があまりにも単層的で、きまりきったものとなるとき、子どもたちの目は、大人の見るのとは異なった真実を見ているのである。われわれ大人の目は、常識というものによって曇らされている。子どもたちの透徹した目は、異なった真実

を見る。しかし、残念ながら多くの場合、彼らは言葉をもたない。従って、彼らは言語表現の道を断たれ、いわゆる「問題行動」を通じてしか表現の手段をもたなくなるのである。ここに、児童文学の存在意義が生じてくる。子どもの目をもって、ものを見つつ、言語表現によってそれを表現することが、その課題なのだ。それは大人にも通じる言語表現を用いることと、子どもの目によってものを見ることと、その葛藤を克服してゆくことによって達成される。

「子どもの本」という場合、そこにはいろいろな本が含まれるであろう。なかには、⑤「子どものために」大人が書いたものもあるだろう。そのような本の存在を否定する気は(iii)さらにないが、私として興味のあるのは既に述べたような意味における「子どもの本」なのである。それは「子どもの目」の輝きを失うことのない大人の書いた本であり、大人にとっても、子どもにとっても意味のある本なのである。そして、現代という時代の特性を考えるとき、その本の存在意義は非常に高いものがあると言うべきであろう。

（河合隼雄『子どもの本を読む』による）

（注1）ラディカル……過激なさま。急進的。

問一 ═══(a)～(e)の、カタカナを漢字に直しなさい。

問二 〰〰(i)～(iii)の語句の意味として最も適当なものをそれぞれ選びなさい。

(i) けげん

ア 劣ったものとして相手を見下げるさま。
イ 理由や事情がわからずに不思議に思うさま。
ウ 相手のことが気がかりで、心を悩ませるさま。
エ 物事の異常さなどに驚いてとまどいを感じるさま。

(ii) あこぎ

ア 際限なく強欲なさま。
イ 物事を命がけでするさま。
ウ 満ち足りて不足がないさま。
エ 休む間もなく動き続けるさま。

(iii) さらに

ア 一向に
イ 重ねて
ウ 最初から
エ 基本的に

問三 ──①「この『子どもっぽい』ということそのものが、そもそも問題なのだ」とあるが、筆者はここで何を述べようとしているのか。最も適当なものを次の中から選びなさい。

ア 単純に「子ども」の対極を「大人」と捉えている現代社会に問題があるということ。
イ 「子どもっぽい」という理由で安易に他人を軽んじてしまうのは良くないということ。
ウ 「子どもっぽい」と決めている大人の判断基準自体に偏りがあるのではないかということ。
エ 「子どもっぽい」と言っている人自身が「子どもっぽい」という可能性があるということ。

問四 ──②「うちに宗教がない」とあるが、これはどういうことか。解答欄に合うように二十五字程度で説明しなさい。

問五 ──③「この親子の問答は日本の現在の状況を極めて端的に表わしている」とあるが、筆者はここでいう「日本の現在の状況」をどのような状況であると考えているか。最も適当なものを次の中から選びなさい。

ア 大人たちが物質的な豊かさばかりを追求している状況。
イ 経済的に豊かになって、欲しいものはみな手に入る状況。
ウ 子どもたちが引きこもったり親に暴力をふるったりする状況。
エ 自分のことで忙しく、他人の心が分からなくなっている状況。

問六 ──④「満足である」の主語を一語で答えなさい。

問七　――⑤「『子どものために』大人が書いたもの」とあるが、筆者はこの表現によってどのようなことを示そうとしているのか。最も適当なものを次の中から選びなさい。

ア　本の作者の姿勢が、子どもに対して恩着せがましいものになっているということ。
イ　本の作者の視点が、現代社会を作る大人たちの常識の枠から出ていないということ。
ウ　本の作者が、問題行動を起こす子どもにも通じるような視点を持っているということ。
エ　本の作者の、子どもに対する特別な思いが作品の中にちりばめられているということ。

問八　〰「子どもの本を読む意味」について。

(i)「子どもの本」とは、どのような本のことを指すのか。たとえを用いないで三十字以上四十字以内で説明しなさい。

(ii) 筆者は、何を目的として「子どもの本」を読んでいると述べているのか。四十字以上五十字以内で説明しなさい。

二〇一四年度　国語解答用紙（一次）

解答はていねいに書くこと。
記号や句読点も一字に数えること。
※欄には記入しないこと。

受験番号			
氏　名			
※			

渋谷教育学園幕張中学校

一

問一
a
b
んで
c
い
d
れた
e

問二
A
B

問三

問四

問五

問六

問七

問八

問九

問十

※

二

問一
a
b
c
d
e

問二
i
ii
iii

問三

問四
ということ

問五

問六

問七

問八
（i）
（ii）

※